

無責任 二十五

若者の無責任離れ

あの女子たちはやさしい、美しい顔をして居りますが、エンガスよ、フォビスの子よ、私はすべてあのやうな物が怖いのでございます。私は精霊の国の人が怖いのでございます。私はあのやうな物をひきよせる、秘術が怖いのでございます。

ウィリアム・バトラー・イエーツ作

「春の心臓」芥川龍之介翻訳より抜粋

青空文庫から

http://www.aozora.gr.jp/cards/001085/files/44_15231.html

暗礁 浮島

霧の中にたちかえる藍色の布きれ
その衣が絡むうすあおい鱗に
落葉も暗く湿る

家を出た娘が帰らない

蠟燭の火がガラス窓のむこうに消える
長い沈黙のあと
終わりだけがだらだらと続く

蒸留酒も潮騒にかげり生臭くある
このふくよかな黒い夜

裏庭に積んだ薪をしけらせたのはアンナ
もしやお前ではなかったか

島の先の切り立った崖から飛び降りたら
お前の生が祝福されたものであったなら
霧につまどうこともなかったろうに

星司とブローハン

清水らくは

街から三里村から六里
星まで百里の海岸に
柱に柱継ぎ足した小屋
星を眺める仕事の場
男が一人 指折り数え
星のありかを記録する
二時経てば 再び数え
星の命を記録する

その日は雲がそして風が
星の姿を吹き飛ばし
男は一人スूपを飲んで
叶わぬ夢を数えてた
梯子の下でとんとん
何かと見れば黒い影
彼に気付いてとんとん
声が聞こえた「あなた自身」

「君は誰だい」「わたし自身」
「何してるんだい」「あなた自身」

男はランプを差し出して
小さな影を手招いた
噂に聞いたブローハン
小さな体小さな手
梯子を上るブローハン

小屋に登った妖精は
形が揺れる闇の中
男の座るその横で
声を発した「わたし自身」
男は星を記録して
それに応えた「わたし自身」
風が闇夜に吸い込まれ
水車の回る音がする

朝日が星を古い夜を
消し去った時気付いたら
そこにはいないブローハン
男はつぶやく「あなた自身」
梯子を下りて小川の流れ
見つめた中に光る星
瞬きながら「わたし自身」
ここで始まる百里の旅

無責任二十五号

責任者 清水らくは

副責任者 浮島

発行 無責任zone

発行日2014年3月1日